

「不亦楽乎」の俗解

——原文を忘れた漢文訓読の危険性——

古田島洋介*

中国の学会に出席すれば、中国側の学者が必ずと言ってよいほど開会の挨拶のなかでこの句を引用し、国外から参加した学者に対して歓迎の意を表わす。日本の中華料理店の門前に、この句を記した色紙やら提灯やらが掲げられていることも少なくない。名高い『論語』のなかでも、とりわけ著名な一句であろう。「朋」は、学会ならば同学の士、料理店ならば差し当たり顧客を指すことになる。このあたりの融通性が、古典の古典たるゆえんの一だ。むろん、単純明快に「朋」を友人の意と解せば、遠方から久しぶりに来訪した友人との再会のうれしさを述べる句となるから、友人の貴重さを教えるべく打ってつけの人生教訓でもある。この句が現在なお愛好されるのも宜なるかなだ。

実は、漢文教師にとっても、この一句は、わずか十字から成るとはいえ、なかなか教えがいがあがる。意味内容もさることながら、語法・文法ひいては訓法について、さまざまな材料を提供してくれるからだ。

すでに世を去った福田恆存氏は、今なお私の尊敬して已まない評論家である。文芸評論・文明批評やシェークスピアの翻訳もさることながら、特に増補版『私の国語教室』（新潮文庫、昭和五十年／「復刊」中公文庫、昭和五十八年）は、多大な恩恵を蒙った掛け値なしの名著であり、今日でも中村保男・谷田貝常夫「編」『日本への遺言——福田恆存語録』（文春文庫、平成十年）とともに、我が座右の一書たるを失わない。その福田氏の「隣人・大岡昇平」その一に、『論語』冒頭の一句を取り上げて論じた文章が見える。言わずと知れた例の一句だ。

有朋自遠方来不亦楽乎
朋有り 遠方より来たる、亦た楽しからずや。

前半「有朋自遠方来」については、まず冒頭の「有」字である。「朋自遠方来」と書いても実質的な内容に違いはないのに、なぜ「有」が置かれてくるのか。それは、漠然と「朋」を持ち出しているわけではなく、存在を呈示する「有」を冠して意外性・突発性を表わしているからだ。来たるべくして来た「朋」ではなく、思いがけなく来訪した「朋」だとの意味合いなのである。また、「自」を「より」と訓ずる知識は訓読に欠かせない。今日でも各種の書類において、期間を記入する欄に「自×年×月×日／至△年△月△日」と印刷されているのが好例となる。英語の〈from...to...〉に相当する漢文の表現が「自／至／」なのである。「従」も同じく「より」と読み、〈from...to...〉に相当する現代中国語の表現が「従／到／」であることを教え、現代中国語に「自從」の

二字で「くから」の意を表わす用法があることにも注意を喚起すれば、つい漢文と中国語を別物と思ひ込む弊も防げる。もし教える対象が中国語履修者ならば、ついでに「自從」の発音 *zìcóng* について指導することも可能だろう。さらに、「より」と訓ずることのできる字として「由」を指摘したり、問題の「より」が、起点を表わす「より」で、比較を表わす「より」ではないと注意したりすることも無益ではあるまい。「来」を「きたる」と訓ずるのも、訓読の基礎知識である。「なぜか変動詞へく」ではなく、四段動詞へきたる」を用いるのか？」との質問が出た。りするといささか厄介な事態になるが、大学院生を相手とする授業であればいざ知らず、大学の学部生の段階であれば、取り敢えずは「それが訓読の習慣だ」と決めつけるだけでもよからう。そして、無視できないのが訓法の問題だ。当該六字は、「朋有り 遠方より来たる」とも「朋の遠方より来たる有り」とも訓ずることができる。前者ならば「点と二点、後者ならば二点と上下点を使うことになるので、返り点の練習材料にもなる。もちろん、肝腎なのは二種の訓法が可能となる理由だ。注目すべきは「朋」の文法機能である。「朋」は、上文の動詞「有」の形式上の目的語にして意味上の主語である。動詞「有」の下にあるのだから、形式のうえでは目的語と考えてよいだろうし、存在を表わす「有」に着いて存在するものを表わしているのだから、意味のうえでは主語と捉えてよいだろう。その一方、「朋」が下文の動詞「来」の主語であることは論を俟たない。つまり、「朋」は上文・下文の双方に対して同時に二つの文法機能を兼ねているのである。残念ながら、此の如く一語に二重の文法的役割を負わせる構文は日本語に存在しない。となれば、いずれかの文法機能を優先して訓読するより致し方なからう。上文「有」との関係性を優先して訓ずれば、まず「朋」から「有」に返って

「朋有り」と読み、残りを「遠方より来たる」と続けることになる。下文「来」との関係性を優先して訓ずれば、まず「朋 遠方より来たる」と読んでから「有」に返ることになる。上に記した「朋の」の「の」は、原文が「朋有自遠方来」であると誤解しないよう用心のために入れたままで、不要と考えれば入れなくともよい。その他、「方」を「来」の修飾語と解して、「朋有り 遠きより方ち来たる」と訓ずる可能性なども視野に入れば、説明事項に事欠かないだろう。

後半「不亦楽乎」は、前半に比べると、はるかにすっきりしている。「不亦く乎」と「楽」の二つしか説明事項がないからだ。「不亦く乎」は「またくずや」と訓ずる反語表現で、一般にはそのまま感嘆表現に転じ、「なんとくではないか」の意に解する。ここでの「亦」は、日本語に謂う「なぜまた、そんなことになったのかね?」「またどうして、そんなまねをしたのか?」などの「また」、すなわち意外の念や不審の念を表わす「また」に近く、「くもまた」「くも同じく」の意ではない。なお、「や」を「乎」の読みとするか、「不」の送り仮名とするかの問題もあるが、これは実のところ問題と称するに値せぬ問題だ。「乎」そのものを「や」と読もうが、「乎」を置き字として「不」に送り仮名「ヤ」を付けて読もうが、結果として「や」の読みが末尾に着いていけばよいのである。「乎」が相手に念を押すような気持ちを表わすことさえわきまえていれば、どちらの形式を用いようと支障はない。「楽」については意味内容が問題となる。焦点は、当該の一句の直前に見える「学而時習之、不亦説乎」(学んで時に之を習ふ、また説ばしからずや)の「説」(悦)との差異だ。「楽」と「説」とは何が違うのか。訓読み「たのし」と「よろこばし」との相違を知ろうと、あわてて古語辞典を引いたりしてはいけない。問題は古典中国語「楽」と「説」との差異であり、日本

の古語「たのし」と「よろこばし」との相違もそれなりに参考にはなるが、あくまで参考にとどまる。「楽」と「説」の違いはなかなか微妙だが、「宋」朱熹『論語集注』に「説」は心に在り、「楽」は主として発散して外に在り（説在心、楽主発散在外）と見えるのを踏まえ、ふつう「楽」は外面的な喜びを、「説」は内面的な喜びを指すと解釈する。解字に基づいて二字の差異を論ずることも可能だが、解字については諸説の是非を見きわめるのが難しく、怪しげな説も目につくため、手出しを控えるのが無難だろう。なにしろ、漢字が発明された太古から『論語』が記録されるまで、どれほど少なく見積もっても約一千年は経っている。漢字が成り立った当初の意味がどこまで保持されていたのか知れたものではなく、ましてや「楽」と「説」（悦）の二字について、それを確認する根拠は何もない。『詩経』周南「関雎」毛伝に「説楽」（悦楽）という連文が登場する以上、すでに前漢の中国人が二字の意味に多大な共通部分を見出だしていたことは事実であり、訓古学に謂う対異散同、つまり「説」と「楽」はほぼ同義で、敢えて区別しようとすれば区別できなくもない程度の差でしかなかった可能性もある。実は『論語』の「説」と「楽」は交換可能であり、たまたま現存のような字句に落ち着いたと考える余地もあるだろう。はるか後代の朱熹『論語集注』に基づいて二字を区別し、況んや解字まで持ち出すのは、もしかすると要らざる賢しらにすぎないのかもしれない。たしかに、もともと「楽」（樂）が木に糸を張り渡したさまに象って弦楽器を表わし、音楽の意から転じて「たのしむ」意を表わす一方、「説」（悦）は「兌」つまり凝り固まっていたものが解き放たれる意に「言」を加え、未だ「悦」字が存在しなかったため、「悦」の意をも兼ねて、結ばれていた心がすっきり晴ればれとして「よろこぶ」意と言われれば、「楽」の外面性と「説」

「不亦楽乎」の俗解

古田島洋介

の内面性が納得できるのだが。
以上、授業の実況中継まがいの字句をくたくたくと連ねたが、事の性質が二分されることは御理解いただけるものと思う。『論語』の当該一句について、漢文法の問題は結論がほぼ明らかだ。それに対して、語句の意味は解釈によって揺れの生じる可能性が残る。「朋」をどのように解するか、「楽」の意味合いをどう受けとめるかは、よほど字義から遠ざからないかぎり、最終的には個人の解釈にゆだねられよう。要は、古典をどう活かすかは個人の自由というものの、自由が効く範囲と効かない範囲とがあるということだ。当然のことながら、まずはこの事実を確認しておきたい。

二

さて、『論語』の著名な一句をわざわざ福田恆存氏の文章から引いて紹介したのは、ほかでもない、当該一句に関する福田氏の解釈に、個人の裁量の範囲を超えた誤解が存すると思われるからである。福田氏は、評論家と称する人々が軽々しく古典を扱い、さして読み込んだわけでもない古典作品を得々と論じてみせる態度、すなわち「古典の一夜漬け」を極度に嫌っていた³⁾。その福田氏にして、このような誤解あり。特に事が『論語』に係るとなれば、専門家用の学術性の高い注釈書のみならず、一般読者向けの平易な解説書も少なくない。なぜ福田氏が誤解に気づかなかったのか、不思議なくらいだ。

もっとも、ここで福田氏個人を非難するつもりは毛頭ない。あの福田氏が私が批判するなど、身のほど知らずの振る舞いであることくらいはわかっている。おそらく、福田氏はあまりに『論語』に慣れ親しんでい

たからこそ、かえって確認することなきまま、自らの誤解に気づかなかつたのだらう。そして、それは独り福田氏の誤解に限らず、日本人の漢文訓読にまつわる普遍的な問題をも含むのである。となれば、福田氏の誤解をありのままに指摘し、福田氏を尊敬する他の人々に同様の誤解を広めないようにするのが、泉下の福田氏に対するせめてもの恩返しとなるだらう。馴染みの古典だからといって油断せず、その字句について改めて意味を確かめることがいかに大切か。これが多少なりとも伝われば幸いである。そして、原文を離れた漢文訓読の危険性をぜひとも認識していただきたい。それこそがこの拙文における最大の意図と称しても過言ではないのである。

福田氏は問題の『論語』の一句を引き、まず自分の学生時代の解釈を述べる。

世間を知らぬ学生のころ、私はそれを甚だ単純に理解してゐた。わざわざ遠いところから自分を訪ねてきた、さういふ友人をもつところ、人生の楽しみといふべきではないか。その程度の意味に解釈してゐたのである。

特に取り上げるべき点は見当たらない。だれもが真っ先に脳裡に想い描く意味だらう。しかし、福田氏はこのような解釈を「文字どほり若気の過ちといふものだった」として退け、「孔子はそんな単純な人物ではない。この儒教の始祖こそ実に端倪すべからざる『犬儒派』だったのである」と述べて、改めて次のような解釈を記す。

あれはかういふ意味だったのだ。「遠方」に強意を置いて読まな

ければならない。すなはち、遠方から訪ねて来てこそ楽しい、孔子の言ひたかつたことはそれなのだ。近くから来たのでは少しも楽しくない。いや、迷惑だ、(わが近き友よ、怒ることなかれ) さう言ひたかつたのだ。おそらく始終そばに付きまといつてゐる弟子どもへの当てつけであらう。

なかなか面白い解釈だ。「遠方」に重みをかけて理解しようとする点もさることながら、さらに一步踏み込んで、常にそばにいる弟子たちへの当てこすりと解する点に福田氏の面目躍如たるものがある。たとい孔子を「犬儒派」と呼ぶことに反発する向きがあろうとも、ここまでは福田氏個人の自由裁量の範囲に収まるだらう。これはこれで一つの解釈だ。ところが、福田氏は、さらに続けて左の如き推測に及ぶ。

論語は断片だから、あるいはこの一句の前に、「有朋去遠方不是樂乎」とでも言ふのがあつて、それと対をなすものではなかつたか。論語には対句の修辭学が多いから、想像できないことではない。弟子の一人が、遠国の王に迎へられでもしたのであらう、表向きはその栄達の饒けでもあるかのやうな形で、「かういふやうにして遠方に去つて行くのは、むしろめでたいことではないか、お前たちも決して悲しむには当らない」とかなんとか祝辭兼激励の辭を述べておいて、この稀代の犬儒派は腹の中では「やれやれ、一人、厄介ばらひをしたわい」と喜んで、思はず口もとがほころびかけたのを、「これはいかん」と慌てて敵かな表情に戻つて、「この男もまた歸つて来る、遠くからたまに訪ねて来られるのも亦たのしいことと思はぬか」とごまかしたのである。それで始めて「亦」がきいてくる。

いづれにせよ、内心のうしろめたさを隠さうとしたその反動で、あまり厳かになりすぎて、弟子たちがそれを神妙深刻に解釈しすぎたやうに思はれる。

推測の内容そのものは、たいそう興味深い。「有朋自遠方来不亦樂乎」の対句として「有朋去遠方不是樂乎」（朋有り 遠方に去る、是れ樂しからずや）を想定し、孔子の本音と建前を探ってみせるのは、ついぞ見かけた記憶のない解釈で、これが中らずと雖も遠からずとなれば、孔子を「稀代の犬儒派」と規定するのも、あなたがち荒唐無稽ではなくなる。福田氏の心酔者ならば、この解釈を以て『論語』の当該一句を脳裡に収めている可能性も高いだろう。たしかに、弟子が任官のために遠国へ去ってゆくのを、めでたいと思うと同時に、厄介払いをしたと感ずるのは、師たる者の心理において一面の真理かもしれない。

しかし、福田氏の解釈は、やはり成り立たないのである。それは、福田氏の記す「有朋去遠方不是樂乎」が「有朋自遠方来不亦樂乎」の対句としては字数がそろわず、そもそも現代中国語に同じい「不是」は漢文において一種の俗語であるため、先秦漢代の文章に出てくるはずがなく、『論語』に記載されなかった一文の想定としては不自然であるとか、古代このかた聖人と仰がれ、至聖先師と称される孔子の言について下種の勘繰りにも近い邪推をめぐらすのは許しがたいとかいう話ではない。事は、ただ一点、「亦」字に係る。

三

福田氏が対句「有朋去遠方不是樂乎」を想定し、当該「有朋自遠方来

不亦樂乎」を「この男もまた帰つて来る、遠くからたまに訪ねて来られるのも亦たのしいこととは思はぬか」と口語訳していることから見て、同氏が「亦」をいわゆる「モまた」に解しているのは明らかであろう。いや、口語訳の直後に付した「それで始めて〈亦〉がきいてくる」との一文から推せば、そもそも「亦」が「モまた」である以上、当該一句の内容のほかにもう一つ何か「樂」なる事があつたはずだとの発想から、対句の想定に及んだのが実情ではなかったか。要するに、福田氏の解釈は「亦」＝「モまた」を発想の起点としているのである。

けれども、先述のとおり、この「亦」は「しもまた」「しも同じく」の意ではなく、一種の強勢語で、「不亦乎」で一つの表現を成す「亦」である。これを「モまた」と解して出発した福田氏の解釈は、やはり誤解であると言わざるを得ない。

たしかに、「亦」＝「モまた」は漢文訓読の基礎知識である。同じ「また」でも、俗に「復」を「二度また」「再びまた」、「又」を「もひとつまた」「さらまた」などと称するのと同様、「亦」を「モまた」と呼ぶのは、なかなか気の利いた先人の知恵だ。この俗称さえ覚えておけば、三つの「また」の基本的な意味合いが区別できるのである。つまり、「復」が二度にわたって繰り返す意を、「又」がさらにもう一つ重ねる意を表わすのに対し、「亦」は「モ亦タ」のように用いて「しも同じく」の意を表わすというわけだ。今日でも英和辞典で also, too などに「もまた」と記されているのは、おそらく漢文訓読との連想で英語を訳していた明治初期の訳語の名残なのだろう。もっとも、一般に「復」や「亦」は送り仮名に「タ」を付け、「又」には送り仮名「タ」を振らないからといって、「又」を「タぬきのさらまた」などと称するのは、送り仮名の要領を記憶するには都合がよいものの、いささか悪ふざけの感が

しなくもないが。

ただし、俗称はあくまでも俗称だ。「亦」の意味合いは、常に「モまた」に限られるわけではない。同様の意を表わすことなく、単に強勢語として働く場合もあり、「不亦乎」の「亦」はまさにその例なのである。実は、これは漢文における常識の一にすぎず、専門知識と称するほどのものではない。たとえば、吉川幸次郎氏も『論語』の一般向け訳注書において、当該「亦」を「モまた」と解する〔宋〕邢昺の説を非とし、〔清〕王引之『経伝釈詞』および〔江戸〕伊藤東涯『用字格』の説を引いて、「亦」を「ごく軽い助字」と説明している。改めて意味を確認する気になりさえすれば、問題の「亦」を「モまた」とする誤解は、手軽な訳注書をばらりとめくるだけで容易に防げるはずなのだ。

「不亦乎」は『論語』に散見する表現である。試みに二条から引いてみると――

……仲弓曰「居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎。……」。(雍也)

……仲弓曰く「敬に居て簡を行なひ、以て其の民に臨まば、亦た可ならずや。……」と。

曾子曰「……仁以為己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎」。(泰伯)

曾子曰く「……仁以て己れが任と為す、亦た重からずや。死して後已む、亦た遠からずや」と。

また、吉川氏は『用字格』に言及したさい、「不亦乎」は「不其乎」に等しいとする伊藤東涯の説を紹介しているが、この「不其乎」

も『論語』に見える。

……孔子曰「へ才難」。不其然乎。……」。(泰伯)

……孔子曰く「へ才、難し」と。其れ然らずや。……」と。

「其」を「その」と訓ずれば指示語、「それ」と読めば強勢語というのは、これまた漢文訓読の常識の一である。となれば、「不亦乎」と「不其乎」が同義とする説も、すんなり納得できるであろう。

要するに、意味を再確認せんとする意思さえあつたならば、あるいは『論語』の字句を改めて調べてみようとの気持ちさえあつたならば、「不亦乎」の「亦」を「モまた」と誤解することはなかったはずなのである。その誤解が防げなかったのは、『論語』冒頭の「有朋自遠方来不亦乐乎」があまりに名高いために、福田氏をして意味を改めて確認する気を起こさしめなかったからであり、また、福田氏が当該一句にあまりに慣れ親しんでいたため、今さら『論語』の他の類句との比較を行なう気にすらならなかったからであろう。馴染みの古典の名句には、このような危険が潜んでいるのだ。

かつて福田氏は「古典を研究の対象にはならない。……私たちが心がけなければならぬことは、現代のなかに、私たち自身のなかに、古典に通じる道をさがすことです。古典に強ひてはならない。自分を強ひて古典にならふことが肝要です。ならふとはなれることです。古典は無心に慣れ、習ふに限ります」と述べた。この見解そのものには多大な共感を覚える。たしかに、さしたる動機も意図もなく古典をつまみ食いして論議のための論議をやらかすくらいなら、古典をひもといて沈黙黙考、それを自らの鑑として慣れ親しむほうが、はるかに優れた古典への

接し方であろう。しかし、古典にどれほど馴染もうとも、親しき中にも礼儀あり、一定の節度を以て臨む心がけを欠いてはなるまい。漢文法を顧慮せず漢文の解釈に及ぶのは、いわば古典に対する不法侵入なのである。

四

それにしても、福田恆存氏ほどの人が、「亦」字に対する誤解から発し、『論語』の著名な一句について、いささか見当違いの推測を繰り広げたというのは、私にとって一つの衝撃である。誤解の理由については右に一応の見解を記してみたが、そこにはもっと深い原因があるような気がしてならない。つまり、福田氏個人にとどまらず、さらに広く、いわば普遍的とも言える原因が、その誤解の裏に隠されているのではないか。それを別出せねば、結局は、世を去った偉大な評論家に対して、揚げ足取りも同然のつまらぬ批判を浴びせただけに終わってしまうのではなからうか。さすがに、それでは卑怯というものだ。

福田氏が『論語』の当該一句に慣れ親しんでいたことは間違いないからう。その姿勢自体に疑いを差しさむ余地はあるまい。とすれば、慣れ親しもうとする姿勢ではなく、慣れ親しみ方、つまり慣れ親しもうとするさいの方法に問題が隠されているのではないか。福田氏が英語に通じていたことは論を俟たない。けれども、氏が中国語に通曉していたとの話は寡聞にして知らぬ。然らば則ち、福田氏が『論語』に慣れ親しんだ方法とは、他無し、漢文訓読にほかならないはずなのである。ここに問題の本質が存するのではないか。

推し測るに、福田氏は訓読「朋有り 遠方より来たる、亦た楽しから

ずや」または「朋の遠方より来たる有り、亦た楽しからずや」を以て当該一句を脳裡に収めていたことだろう。むろん、両者が同時に氏の念頭に置かれていたと考えても差し支えない。もし福田氏が訓読とともに常に原文「有朋自遠方来不亦楽乎」をも想起していたのであれば、「亦」を「モまた」と誤解する可能性は低かったことだろう。なぜなら、「モまた」は一般に「(体言)モ亦タ」の形式になるからだ。この形式に当てはめて解釈するには、否定辞「不」が目障りなのである。ところが、いずれか一者のみにせよ、両者ともににせよ、とにかく訓読のみを以て馴染んでいたとすると、慣れ親しめば慣れ親しむほど「亦」を誤って「モまた」と解する危険性が高くなるだろう。それは、日本語の面からも、また漢文の面からも、誤解の可能性が高まるとの話である。

まず日本語として、「亦た楽しからずや」は、どのように響くだろうか。通常の日本語の感覚で受け取れば、やはりこの「亦た」は「(〜)と同じく、これも」また」の意に聞こえてしまうであろう。助詞「モ」がなくとも、日本語の語感としてはそれが常識というものだ。むろん、「亦」||「モまた」という知識があれば、その思い込みを助長する。「モまた」ならば「(体言)モ亦タ」の形式になるはずだとわかってはいても、日本人である以上、漢文法の感覚よりも日本語の語感を優先してしまふのは無理からぬことだろう。たとい「(体言)モ亦タ」を意識していても、上文「有朋自遠方来」全体を体言に準ずる語句、すなわち英語で言えば名詞節に相当するものと見なし、「思いがけなく友人が遠方から訪ねてくること」と理解しておけば、文法的にも破綻を来たさない。これに合わせるべく律儀に訓読するなら、「朋有り 遠方より来たる(こと)も」または「朋の遠方より来たる有る(こと)も」として、下文「亦た……」に続くことにならうが、(訓読は簡潔を旨とするから、

そのような読み方を放棄したのである。つまり「モまた」の「モ」は、訓読の都合上たまたま省かれたのだから、解釈としては「亦」≡「モまた」で差し支えあるまい」と断じてしまえば、それまでである。

次に漢文として、「亦た樂しからずや」はどうなるかというところ、実は、この訓読からは二種の原文の復原が可能なのである。「不亦樂乎」でも「亦不樂乎」でも、結果として訓読に相違はなく、いずれも「亦た樂しからずや」となってしまうのだ。「不亦」ならば『論語』の原文そのまま、もちろん「亦」は強勢語だが、語順が逆転して「亦不」になるとどうなるのか。何を隠そう、この「亦」こそ「モまた」なのである。たとえば、「非陛下之明、臣亦不得施其微功」とあれば、「陛下の明に非ずんば、臣も亦た其の微功を施すを得ず」と訓読し、「もし陛下の御明徳がございせんでしたら、臣下たる私もこのささやかな手柄すら立てることができなかつたことでありましょ、う」と解するわけだ。『論語』の原文を離れて「亦た樂しからずや」という訓読のみに頼っていると、いつのまにやら脳裡で恣意に語順を転倒させて「亦不」に作り、あたかも「モまた」に否定が続くかの如く思い込んでしまう危険がある。「(体言)モ亦タ」の形式から見れば、当然『論語』の原文では否定辞「不」が目障りなはずだが、訓読「亦た樂しからずや」となると、邪魔者は消せ、「亦」の上に位置する「不」などどこへやら、「亦不樂乎」との区別が限りなく薄らいでしまうのだ。

かくして、訓読のみを以て「有朋自遠方来不亦樂乎」に慣れ親しんでいると、「亦」に対する誤解の危険性がますます増大してくる。要点はただ一つ、原文ならば後半の第一字は「不」だが、訓読では後半の第一語が「亦た」になってしまふということだ。ここに訓読のみに頼る漢文読解の本質的な弱点がある。語順を転倒させた訓読では、原文の統辞構

造を正確に把握できず、そもそも原文の統辞構造に対する意識の稀薄化を免れない。返り点を打ち、日本語の語順に変換して発音しつつも、古典中国語の原文はそのまま保ち、必ず語順を確認すること——これが、どうしても訓読に要求される条件なのである。耳で日本語を聴きつつも、目では古典中国語の語順を逐うわけだ。今なお漢文の書物が、書き下し文のみを載せることなく、印刷の煩わしい返り点付きの原文をも呈示しているのは、このような事情からなのである。

本誌第五〜七号所載の拙論で、漢文訓読の原理が記憶術であることを論じた。漢文訓読とは、訓読の暗誦を通じて、原文を暗記する二層構造の記憶術だというのが私見である。訓読のみの暗誦では、つまり単層構造の記憶術では、いかに欠陥に満ちた方法に終わってしまうかが十分に御理解いただけることだろう。単に訓読を通じて漢文に慣れ親しむだけでは、自ら誤解の種を撒き散らしているようなものだ。意味を正確に把握するとの観点から見れば、原文そっちのけで訓読を暗誦するよりも、正確な口語訳で記憶するほうが安全である。ゆめゆめ原文を離れた訓読の危険性を忘れてはなるまい。もっとも、だらけた口語体の訳文が記憶に不便なことは、重々承知したうえで話であるが。

冒頭に引いたとおり、福田氏は「隣人・大岡昇平」において、一つも訓点を付けず、白文のまま「有朋自遠方来不亦樂乎」を引用している。これを知りつつ福田氏の脳裡に原文が存在していなかったと推測するのは、いかにも不当のように見えるだろう。しかし、当該「隣人・大岡昇平」を読めばただちにわかるとおり、福田氏が引用したのは、国際文化会館の扁額に記された吉田茂の書に成る「有朋自遠方来不亦樂乎」十字であった。常日頃から脳裡に焼き付いていた原文を引いたわけではないのである。

原文を離れた訓読の独り歩きがもたらす誤解——福田氏の抱えていた問題は、独り福田氏のみの問題にとどまらず、普遍性を以て今日に持ち越されている。いや、持ち越されているどころか、漢文教育が見る影もなく衰え、訓読の営みがますます縁遠くなる一方の現今、原文を忘れた訓読の危険性はいよいよ高まるばかりだ。一つだけ、やはり『論語』の当該一句の「亦」を「モまた」と解している例を挙げてみよう。平成十二年（二〇〇〇）四月二十七日付（二十六日発行）『日刊ゲンダイ』第二十三面に次のような字句があった。電子ブックを推奨する記事の一節である。

電子ブックが机上に一台あれば、ソフトを替えるだけでいいのだから、さまざまな辞書の置き場所からも解放される。パラパラと辞書を広げるのも悪くはないが、キーボードをたたいて検索するのもまた楽しからずやだ。

露骨な「モまた」である。漢字「亦」が姿を消し、平仮名で「また」と記されているだけに、原文に対する意識がいっそう薄められる。おそらく、こうした「また楽しからずや」の用例は多数にのぼり、今後も多く各種の紙面に登場することだろう。

ただし、念のために断っておけば、本稿はこのような「亦」の理解をあくまで誤解とし、その誤解が生じた原因・理由を追究したにすぎない。誤解だから悪い、誤用はやめよ、と言っているわけではないのである。

「不亦楽乎」＝「亦た楽しからずや」という訓読を、単なる漢文の訓読にとどめず、訓読表現として日本語に取り入れるとなれば、「亦」が強勢語のままでは応用が利きにくい。やはり、多少の歪みは承知のうえで、「亦」を「モまた」に転用するしかなかるう。それはそれで仕方がない。「不亦楽乎」の「亦」がもともと強勢語であることを知りつつ、いわば確信犯として「亦」＝「モまた」に転ずるのであれば、誤用と言うよりも、むしろ一つの気の利いた措置になり得る。ささやかな漢文法と心中するよりも、訓読表現がもたらす日本語の豊かさと共に生きるほうが健康的だろう。問題は、「不亦乎」の「亦」の本来の意味合いを知らず、また知ろうとせず、ついわかっているような気になってしまふ無邪気な知的怠惰なのである。本義をわきまえたうえでの話ならば、だれもが知る『論語』の名句を応用した訓読表現も亦た楽しからずやだ。

なお、「不亦楽乎」は、あまりに著名な一句ゆえに、おおよそ明代以降、本家本元の中国でも俗用に供されている。これは一つの言語現象として興味深い。中日辞典や成語辞典の類で「不亦楽乎」を検すると、口語で戯れに用いる表現で、程度が甚だしいことを表わすとの説明がある。しかも、その甚だしさは、ずぶぬれで「さんざん」だの、忙しくて「へてこまい」だの、罵り方が「めっちゃくちゃ」だのという内容だ。楽しさとは無縁である。現代中国語の用例を二つ挙げてみよう。

渾身上下淋了個不亦楽乎。

全身ずぶぬれになって、さんざんな目にあった。

今天他忙得個不亦楽乎。

今日、あの人のはててこまいの忙しさだ。⁽¹⁰⁾

日本人は、「亦」を強勢語と意識せず、つい訓読の語感から「モまた」に転用し、「楽」つまり楽しさを強調する表現として俗用する。一方、中国人は、「楽」の字義にはこだわらず、もっぱら「不亦乎」という感嘆表現に注目し、程度が極端なことを表わす言い回しとして俗用しているわけだ。名句のたどる運命は、まことに興味深いものである。

注

(1) 福田恆存『論争のすすめ』（新潮社、昭和三十六年）二八六―二八八頁。なお、当該「隣人・大岡昇平」は、『福田恆存全集』全八巻（文藝春秋、昭和六十二―六十三）には収録されていない。

(2) 「来」を、カ変動詞「く」ではなく、四段動詞「きたる」を用いて調ずる理由について、多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』（角川書店、昭和五十四年／復刊）国書刊行会、平成十年）一六五頁は、「キタルの方が強く重々しい感じを与えるからであろうか」と記している。私見によれば、これは中らずと雖も遠からずの推測だ。「く」よりも「きたる」のほうが「強く重々しい感じを与える」のは事実であろう。しかし、なぜ「強く重々しい感じを与える」読み方が好まれたのか。その理由を指摘しなければ、だれしも今一つ納得しがたいだろう。「そのほうが漢文らしい」では答にならない。これについては、やはり訓読の原理が記憶術であることを以て説明するのが妥当ではないか。はっきり記憶に刻み込むには、「強く重々しい感じ」を持つ語のほうが有利だからだ。要するに、響きの弱い単音節語「く」よりも、響きの強い複音節語「きたる」のほうが記憶に便利であった――これが事の真相かと愚考する。漢文訓読の原理を記憶術と規定することについては、本誌第五―七号所載の拙論を御参照いただきたい。

(3) 福田恆存氏が何らかの文章で「古典の一夜漬け」を厳しく批判していたことは記憶しているが、情けないことに文章名は失念した。暫く御寛恕を請う。

(4) 注(1) 所掲書二八六頁。

(5) 同右書二八七頁。

(6) 注(5) に同じ。

(7) 「又」を「たぬきのサラマタ」と呼んだ例は、吉沢康夫『新漢文の基本構文脚』（三省堂、平成三年）一一頁に見える。ついで他書で見かけた記憶がないので、おそらくは吉沢氏の創案に係る呼び方であろう。

(8) 吉川幸次郎『論語』上（朝日新聞社『中国古典選』3、昭和五十三年）二二―二四頁。なお、前述の「説」と「楽」の差異の問題について、吉川氏は同書二四頁に「説の字は……持統的なよるこびを示し、……楽の字は、突然のよるこびを示す如く感ぜられる」と述べるが、今は暫く採らない。

(9) 「伝統にたいする心構」『福田恆存全集』第五巻（文藝春秋、昭和六十二年）二〇七頁。

(10) 残念ながら「不亦楽乎」を用いた中国人の会話を自ら耳にした記憶がないので、辞書から用例を拝借した。「渾身……」は、『新漢日詞典』（『中国』商務印書館・『日本』小学館、平成三年）に見える例文の後半そのまま、「今天……」は『現代中国語辞典』（光生館、昭和五十七年）が載せる例文に多少の語句を補充したものである。いずれも簡体字を常用字体に統一し、訳文については若干の字句を改めた。